

5月17日(水) 教員研修会報告

第1分科会

【幼保小の架け橋プログラム】

～幼保小の実践を通して見えてきたすてきな子どもたちの姿を通して～】

- ・ 幼保小の架け橋プログラムについて改めて知ることができた。幼稚園と小学校の「ねらい」についての違い。「～を味わう」⇔「～ができるようになる」子どもたちにとって幼稚園から小学校での生活はつながっていて分けられるものではなく、その接続期が大切であるということを知った。
- ・ 幼稚園での学びを小学校の先生方に知ってもらうことが必要だと思った。そうすることで小学校での活動につなげていけるのではないかと感じた。
- ・ 幼稚園や保育園での経験を小学校でも引継ぎ、「やったことある！」と子どもたちが思うことでさらに発展した学びにしようとしていることを知り、座学だけの勉強だけではなく、生活科という教科で子どもたちの興味・関心を引き出してくれているのだと安心した。
- ・ 「小学校入学が0からのスタートではない」「幼稚園生活が小学校へ行くための練習ではない」ということや0歳から18歳の学びは連続しているのだということを改めて感じた。
- ・ 幼稚園と小学校の動画を観て話し合いをした。幼稚園では子どもたちの気づきを全て受け入れ保育をしていて、その経験が「やったことあるからやりたい」という思いに繋がり、小学校へと引き継がれて授業をしていた。
- ・ 幼保小の連携でそれぞれがお互いのことをよく知ることが大切だということを改めて感じた。特に小学校は幼稚園・保育園でどう子どもたちが過ごしてきたか、何を経験してきたか、など知っていく必要があるということにも共感した。
- ・ 子どもの発達段階を見通した『架け橋期』の教育の充実の重要性を感じた。子どもの側に立てば通う場所(幼保→小)が変わったから今日から〇〇になる、と分けきれのわけではなく繋がっているということにも共感した。
- ・ 幼稚園・保育園でのあそびを通した学びが小学校で育てたい力に繋がるということや「1年生が0からのスタートではない」のは、幼稚園・保育園の日々の教育があるから、という言葉が心に残った。

第3分科会【音からひろがる子どもの世界】

- ・音感愛という言葉は初めて聞いた。子どもは身の回りの物や人の声、音楽からその印象を感じ、共鳴し、感情が起こり、さまざまな連想を引き起こしている。そのため、音環境の作り方を工夫していくことや、保育者の心のゆとりが大切であることを学んだ。
- ・子どもが感受した音を様々な方法で表出、表現した際に、保育者や友達がそれを受け止め、さらに反応としての表現をすることで対話的になり、豊かなコミュニケーションに発展するのだと再確認した。視覚からの情報が優位になりがちだが、よく「聴く」ことから「もっと知りたい」気持ちが増え5領域にもつながっていく。保育者としてはつなげていくような働きかけを意識していくことが大切だとわかった。
- ・表現するためにはまず感じたり気づいたりすることが大切。聴こうと意識を向けることで風の音など自然の音を感じたり自分が出す音にも気がつき周りの人への気づきにもなっていくのだと思った。
- ・音を様々な視点でとらえることができるということがわかり、表現に対する考え方や幅が広がった。その中で、ピアノがなくても音楽の活動はできるという話が、今後活かしてみたいと思った。歌うだけではなく、言葉あそびや子どもの発した言葉からリズムをつけたり、子どもの気づきにも目を向け、一緒に共感していきたいと思った。
- ・表現の中でも草や花の形や色に気づくだけではなく、それらの音にも意識を向けるということを知ってはいたが、普段あまり意識できていなかったと思った。自然界の音だけではなく、日常の中にある音に耳を傾け、その気づきや表現を子どもたちと共に感じることの大切さが改めて分かった。
- ・音にもたくさんの種類があり、人の声、自然の音、楽器の音色、心臓の音、目を向けると身近なところにたくさんの音があるのだと改めて感じた。もっと耳を澄ましながら子どもと関り共感していきたいと思った。また、子どもたちに向けた声掛けのトーン、そして表情を今一度気をつけていくことが大切だと思った。
- ・わらべうたはペントニック（5音）なので輪唱してもよい音楽になる。5音は子どもが楽器をどういう風にならしてもよい音楽になるということ学んだ。
- ・音は子どもたちにとって当たり前の存在ではなく、さまざまなものになりえるものだということ学んだ。「雨がポツポツ降っているね」「雨がザーザー降っているね」など与える印象の違いがある。そのようなことを意識しながら話すことが大切なのだと感じた。音を聴いて楽しむことができる子どもたちと日常を丁寧に過ごしていきたいと感じた。